



天使

発行
天使大学 広報委員会
〒065-0013
札幌市東区北13条東3丁目
TEL 011-741-1051(代)
FAX 011-741-1077
http://www.tenshi.ac.jp

7号館新築工事着工

管理栄養士学校指定規則の改正に対応

事務局長 宗万 功

懸案となっていた栄養学・食品学・調理学関係実習室を中心とした新校舎は、明春施行される栄養士法の一部改正に沿った最新の施設・設備の導入を計画し7月26日に着工されました。

新館1階の集団給食実習室は、検収室・下調理室・主調理室・実習食堂等から構成され、もちろん最新のHACCPシステムに対応して、衛生管理を重視した施設・設備となっています。

2階の臨床栄養・調理実習室の試食室兼デモ室は、師範台の調理状況が、デジタルプロジェクターによって大型スクリーンに投影されます。

3階は、栄養学・食品学関係の多目的実験実習室が中心となり、官能検査室・測定室、一般講義室も備えられています。

4階の栄養教育実習室は、栄養アセスメントに必要な身体の測定機器が設備されています。この実習室では、管理栄養士に求められる臨床栄養・公衆栄養指導の基礎を育てるグループワーク演習も行います。また、モニタリングのできる個別のカウンセリング室と大講義室も備えられています。



上：工事風景

左：完成予想図



天使大学指定寮来春完成 『アンジェリーク・コア』

総務課長 久保 則雄

2002年4月から入居可能な指定寮が本学から徒歩2分の場所(札幌市東区北14条東4丁目)に建設中です。本学には学生寮がなく、札幌市外出身の学生は女子学生会館・ワンルームマンション・アパート等に入居しています。今年に入り、北海道ジェイ・アール都市開発株式会社から、天使大学学生の福利厚生施設の一環として指定寮を建設したいとの要請があり、本学としても出来る限りの協力をする事で、合意が成立し建設が開始されました。本学としては指定寮を持つことで、札幌市外の父母の皆様が安心してお子様を天使大学に進学させることができるというメリットがあります。



この建物は、鉄筋コンクリート造8階建、ワンルームマンション形式(1部屋の面積21㎡)となっており、次のような概要になっています。

なお、現在のところ、この指定寮の受け入れは女子のみとなっています。

1. 部屋内の設備

クローゼット(収納)・バス・トイレ(ウォシュレット付)・洗面台・キッチン(IHヒーター付)・電子レンジ・冷蔵庫・テレビ(BS対応)・洗濯機・ベッド(可動式)・机(可動式)・下駄箱・FFストーブ

2. 共用部分の設備

バルコニー・カード式オートロック・エレベーター・食堂・宅配ボックス・コインランドリー(大型洗濯・乾燥機付)・電話回線・インターネット回線・駐輪場

3. 賃料(1カ月)

50,000円程度(管理費を含む、光熱水費別)

COLUMN プラタナスのこと

プラタナス(日本名:すずかけの木)は、「医学の父」ヒポクラテスがギリシアのコス島に医学校を開いたとき、その木陰で教えるを説いたと伝えられています。

本学の周りのプラタナスは、1940年頃天使病院の院長だったSr.ステルゼルが仲間の修道女たちと若木を植えたことがはじまりです。以来、春が近くなると雪解けを待ちきれないように若葉を芽吹かせ、夏には、通学する学生たちに木陰を作り、秋から冬にかけては、枝々から可愛い実をのぞかせ、四季を通じてここに集うすべての者に安らぎを与えています。

現在のプラタナスは、地下鉄工事(1990年)の際に植え替えられ2代目になっていますが、これからも本学と私たちを見守り続けてくれることでしょう。(学生便覧より抜粋)



授業紹介① 教養教育科目

情報処理演習

教養教育科 助教授 川口 雄一

コンピュータは最初、専門家たちのみが扱うことのできる、数値計算専用の機械として作られました。これには「計算機」という日本語が充てられました。その後、コンピュータの改良が進み、個人用の計算機、パーソナルコンピュータが作られました。これは縮めてパソコンと呼ばれるようになりました。パソコンは普通の個人が文書処理(ワープロ)や表計算、通信や情報検索のために利用する道具です。つまりパソコンは、紙と鉛筆、電卓、電話やFAX、本や図書館などに替わる、新しい文房具です。

情報処理演習では、パソコンを文房具として使うために必要な技術や知識を、演習を通じて習得します。演習の目標は、実験や調査などで得たデータをパソコンを用いて加工できるようになることにおきています。加工されたデータは、専門的な判断を下す場合の資料となります。パソコンを用いて、データを資料へと加工するためには、アプリケーションとして、主にワープロと表計算を利用します。これを受けて、情報

処理演習Ⅰではワープロを、情報処理演習Ⅱでは表計算を実習します。情報処理演習Ⅲは、まだ開講されていない科目ですが、データに対する統計処理の実習が中心になる予定です。

既に大学外で資格試験を受け、情報処理の能力があると認定された学生には、その資格をもって情報処理演習の単位を認定しています。将来は学生のほとんどが小中高校でパソコンの基礎技術を習得するようになると予想されます。社会の動静をふまえ、天使大学における情報処理演習の意義を常に検討してゆかなくてはならないと考えています。

最後に、情報処理演習用の設備に関して述べます。1996年度に現在の情報処理室が作られ、パソコン61台とプリンタ16台が設置されました。1999年度にはインターネットへこれらを接続し、情報検索などに役立てています。平日であれば、朝9:00から夜6:00まで、講義で使用していない限り情報処理室を開放しています。しかし、学生は一日の講義が終わる午後4時30分以降に情報処理室を使う場合が多く、開放時間帯の延長を望む学生からの強い要望があります。



授業紹介② 短大専攻科専門科目

助産学実習Ⅳ(継続事例実習)

看護学科講師 渡辺 由加利

助産学実習Ⅳは、学生が一人の女性の妊娠中期(妊娠16週頃)から分娩・出産後1ヶ月までを受け持つ実習で、6月上旬から1月の中旬までの期間で行います。実習の目的は、一人の女性の妊娠期・分娩期・産褥期の正常経過の助産診断を行い、対象者の生活にそった保健指導および分娩助産を行うことにより、周産期における助産婦の役割を考えることにあります。対象者の生活にそった保健指導という点では、助産婦としてだけでなく保健婦としても大切な能力であり、保健婦・助産婦の合同課程である専攻科の実習として重要な位置を占めています。

具体的な実習内容では、妊娠期は受け持ち妊婦の健診にあわせて、6回程度の面接を行います。学生は妊婦と接する機会が少なく、妊婦の生活をイメージし援助関係を築くことに時間を要します。妊婦自身が納得し生活に取り入れられるような援助を考えるために、実際に自分で貧血に良い食事を作ってみるなど、妊婦の生活を理解しようと様々に努力をしています。10月下旬～12月上旬はいよいよ分娩の時期となります。出産はいつ始まるかは分からな



いため、学生は夜間でもすぐに実習に行けるように、服を着たまま寝たり、中には化粧をして寝る学生もいます。いよいよ分娩を迎え、産婦とともに陣痛の苦しみを乗り越え分娩を介助する事で、より産婦との関係性が深まっていきます。産褥期では、母子を一緒にケアするのは大変ですが、生まれた児に対する学生の愛情はひとしおで、学生間で自分の受け持ちの赤ちゃん自慢をしゃべっている姿は何とも微笑ましいものです。退院に向けて、本人だけではなく夫や家族へも退院指導や沐浴の指導を行い、援助の対象が広がっていきます。退院1週間後の家庭訪問は、病院と家庭では異なる面を発見したり、入院中の援助の評価につながり、改めて生活を踏まえた援助とは何かを考える機会となります。産後45日目の健診が最後の面接となりますが、妊娠からともに歩んできたという体験は、学生にとって一生の宝となるような貴重な体験です。

妊娠出産は、女性にとって危機的な体験であり、女性がその体験を乗り越え、満足した体験ができることにより、我が児への愛着が生まれてくるといわれています。そのための支援をしていくことが助産婦の役割として重要です。学生にとっても継続事例実習は、他の課題や実習と重なりながらの約半年にわたる実習であること、また助産婦として保健婦としての自己を見つめることとなるため、精神的にも身体的にも非常に厳しい状況であり、危機的な体験とも言えます。助産学実習は学生が受け持ち事例とより良い援助関係を築くことや困難な体験を乗り越えることを通して、自分への自信や満足感を持ち、助産婦、保健婦としての一步を踏み出せる体験となるような実習にしたいと考えています。

(短大専攻科兼任)

学事暦

(2001年度前期)

- 4月2日 入学式
- 4月3日 新入生オリエンテーション
- 4月4日 出会いと親睦ゼミ
- 4月9日 前期授業開始
- 4月19日 始業ミサ・イースターの集い、学生総会、定期健康診断

- 5月9日 献血
- 5月12日 公開講座(以降、毎週水曜日に実施。計7回)
- 5月22日 合唱コンクール、献血
- 6月27日 体育祭
- 7月6日～8日 北海道地区大学体育大会
- 7月23日～ 前期定期試験
- 7月30日～ 夏期休暇

授業紹介③ 栄養学科専門科目

調理学実習

栄養学科講師 山口 敦子

近年、食生活が多様化してゆく中で、食材については利便化・国際化などの志向がみられ、食べ物については健康の保持・安全性・おいしさなどが求められています。

このような食環境の中で、食材の取捨選択や調理過程で起こる諸現象の理解、喫食者の年齢・健康状態・嗜好などに対応した食事計画が求められています。

調理学実習では、調理学・栄養学・食品学の知識をもとに、食品の利用効率を高める調理操作や盛り付けなどおいしく食べるための創意工夫などについて実習します。また、調理における衛生的配慮や食べ物の安全性についても学んでいきます。さらに、身に付けた知識を人々の健康の保持・増進と疾病の予防のために生かしていけるように学習します。

〈調理学実習Ⅰ〉では、日常食の基礎と献立作成、日本料理・西洋料理・中国料理の基礎に加え、地域の食材を利用したアイデア料理、カルシウムや食物繊維たっぷりメニュー、

季節のおもてなし料理などを実習します。

〈調理学実習Ⅱ〉では、実習Ⅰを基本として、子どもから高齢者までの対象者別の献立や



伝統的食文化に基づく行事食、郷土料理などを実習し、それらを参考に各自でレシピを考案していきます。

実習Ⅰ・Ⅱを通してテーブルマナーやテーブルコーディネートの、おいしさの評価法としての官能検査手法についても学んでいきます。

実習後には各自レポート作成や栄養価計算を行っています。自由研究として自分で見つけた課題を文献で調べたり、インターネットで情報を集めたりと個性あふれるすばらしいレポートが作成されています。

授業を通して、個々人のもっている感性や創造性を大切にしながら食事計画から喫食に至るまで総合的なスキルアップを目指します。

授業紹介④ 看護学科専門科目

看護過程とヘルスアセスメント

看護学科講師 矢野 理香

医療現場の病院から在宅への移行、患者の重症化に従い、看護職に求められるアセスメント能力も高度になっています。24時間、患者に関わる看護職にとって、フィジカルアセスメント（問診と視診・触診・聴診・打診の全てを総合して下される患者の身体状況に対する判断）は、そのケアの根拠と効果の測定・評価のためにも欠かすことのできない技術です。このために、看護学科では「看護過程とヘルスアセスメントⅠ」を2年前期、「看護過程とヘルスアセスメントⅡ」を3年前期に開講しています。



そして4月から、この「看護過程とヘルスアセスメントⅠ」がスタートしました。その一部、フィジカルアセスメント技術の学習目標は、「対象者を尊重する態度」で、人体の構造・機能に基づいた身体診査を実施し、その結果正常であると判断できること、系統的・意図的にインタビューできることなどです。

この目標に向けて、講義、デモンストレーション、自己学習、模擬患者への演習が2回展開されました。デモンストレーションは看護教員によるもの他、形態機能学の講師でもある渡辺智先生（本学非常勤講師）の協力を得て、臨床の中でのポイントをもとに身体診査の実際を教えてくださいました。また、演習は模擬患者役として看護学科以外の教員・職員皆様のたくさんの協力を頂きました。この演習に向けて学生たちは、空き時間や放課後を用いて必死に練習を行っていました。学生たちが世代の異なる方々に看護者として接し、その緊張感の中で、技術の学びはもちろん、コミュニケーションの困難さ、自己の傾向性を振り返る良い機会となりました。そして、何よりも模擬患者の方々の対応・助言に学生たちは、人と関わる喜び・楽しさと共に今後の課題を実感していました。

学生課近況

学生課長 内山 昌子

話し合い大作戦

根が真面目なので（笑わないでください）「学生中心の大学」をめざし日々奮闘中。6月某日、講義室を覗いて仰天。ペットボトル、紙くず等が散らかり放題。今日まで曲がりなりにも清潔な校舎を誇っていた、これが天使か……。咄嗟に教務課との連携で現場保存とし、担任・クラス代表・葦の会役員に現状を見てもらう。その場で学生には一切注意せず、感想を書いて貰った。これは神の与えた（信者でないが時々神を口にする）絶好の機会、この機を逃してなるものかとはばかり、それ以来、週1回の学生との話し合いを続けている。どうしたら学内の清潔が保てるか学生自身が考え行動するために、小さ

な目標を立てそれをクリアし、達成感と自信を得るために。前途多難を覚悟し、とにかくやってみようの精神で学内から紙屑・ペットボトルの放置がなくなるようにと運動を展開中！

自分の身は自分で守る

危機管理について、昨今の社会状況から、「体育祭」終了時を利用し、「自分の身は自分で守ること」と、思わず学生に話した。メル友殺人の被害者が道内の出身だったことから、TV局の電話取材を受けた。その時、注意を促す掲示を行った事と数日後に全学挙げての「合唱コンクール」があるので、その場で注意を喚起する旨を伝えた。「そのような取り組みをしているのは天使さんだけ」と乗せられ、急速、取材を受ける羽目になる。開けば夕方からの放映だと言う。いつもの事ながらTV局の強引さに驚くが、学生もインタビューを受け無事終了。「天使さんは、教職員と学生さんの間が近いですね」と1時間程滞在の記者さんからの印象。勝手にほめていただいたと解釈しているが……。

「学内も学外でも 充実しています」



栄養学科1年 濱田 真梨菜

天使大学に入学して、約半年が経ちました。まだ、半年ですが、イースターのつどいに始まり、合唱コンクール、修養会(宿泊研修)、体育祭

といった大きな行事を経験しました。

私たちが実際に行う最初の行事であった合唱コンクールでは、練習不足で、あまりよい結果を出せませんでした。6月の修養会では、レクリエーションのバレーボールや、グループディスカッションを通してたくさん友達が増えました。修養会は、私にとって友情を深めるよい機会となりました。体育祭では、修養会を経て団結力がついたせいか、クラスで入賞をめざして放課後練習をし、よい結果を残すことができました。これらの行事によってクラスの協調性が高まり、学校生活がさらに楽しくなったと感じています。

大学以外の生活では、バレーボールのサークルに入っています。このサークルを通してバレーボールの楽しさを知り、他大学にたくさん友人もでき、道東旅行なども一緒に行きました。4年間続けたいと思っています。

勉強面では、今まで学びたかった栄養学についての勉強が、講義や調理実習を通して、しっかりと学べ、とても満足しています。レポートやテスト勉強は少々大変ですが、自分のやりたい勉強なので頑張れます。

私には将来やりたいことが二つあります。一つ目は、病院の臨床栄養士として患者さん一人ひとりの健康状態を食事を通してサポートし、患者さんの心のケアもしていくことです。二つ目は、食品会社で食品開発の研究をすることです。食品を分子レベルから研究し、現代のニーズに合わせた食品を開発してみたいです。

今後、自分にあった将来の道を選ぶために、今まで以上に様々なことに興味を持ち、より深く栄養学について学んでいこうと思っています。

「初めての男子学生です」

看護学科1年 高橋 正剛



この4月に晴れて天使大学に入学し、今、私は非常に楽しく充実した大学生活を送っています。今年から始めて男子学生が入学したので、当然ですが周りは女の子ばかりです

が、私たち男子学生にとっては好都合(何が?)なので、みな楽しんでいる様子です。キリスト教の大学なので、最初、毎日アーメン、アーメン言われるのかと思っていましたが、そんなことは当然あるわけがなく、大学の教育内容や先生方の人間性の中に、キリスト教の博愛の精神が溶け込んでいるといった感じです。また学校の雰囲気にも、その精神が根づいていて厳かでありながらやさしく包まれているような、そうまるで幼き頃に母に抱かれた時の安心感に似た心地よさがあります(ちょっと、大袈裟だけど)。また天使大学は行事が充実していて、合唱コンクールや体育祭といった、他の大学にはあまり見られないものもあります。合唱コンクールは、練習できる時間が非常に少ないにもかかわらず、どのクラスもみなうまく合唱になっていて、特に2、3年生のうまさに少し感動しました。またこういう行事の時、女子の結束力はすさまじく、参加を怠けていようものならすぐに冷たい視線を投げられ、村八分にされそうなくらい恐かったので、きちんと参加することにしました。でもこういう行事が多くあったおかげで、クラスのみんな、他のクラス・学年の人とも仲良くなれたような気がします。

勉強の方は、宿題やレポート課題がけっこう多く忙しいですが、おもしろい講義もあり、特に私は近藤学長の講義がおもしろくてたまりません。お仕事で世界中を飛びまわっているようで、その時の話や長年のご自身の看護経験を織り交ぜたウィットに富んだ授業が好きです。

まだ入学してから4ヶ月程度ですが、やっと大学に慣れたという感じです。これから先、まだまだたくさん学ぶことがあり、大変そうですが楽しみでもあります。

新 入 生 メ ッ セ ー ジ

「セミプロ集団です」

短大専攻科 五十嵐 友子



専攻科に入学してから、早いもので一年の半分が過ぎようとしています。専攻科への合格が決まったのは、まだ雪の降る肌寒い日で、合格発表を見るのが怖くて友人と二人、何本もの電車を見送り、なかなか見に行くことができなかったことを、今ではとてもなつかしく思えます。

専攻科は、誰に聞いても「大変だ」「つらい」と言われ、天使短大の看護科に通っていた私は、受験前からそのような噂を聞き、自分にはやっつけていけるだろうかと感じていました。それでも私が専攻科を選んだ理由は、一年で保健婦・助産婦二つの資格が取得できるので、どうせ大変なら一年で取ってしまえる方がお得と考えたことと、地域の母子保健活動にとっても興味があり、合同課程だからこそ学び取れるものがたく

さんあるに違いないと考えたからでした。そして、看護科の3年間を乗り越えられたことでの少しの自信と、仲間がいればやっつけていけそうな気がして、専攻科で一年間、自分を試すつもりで頑張ってみようと思うようになりました。

そのような意気込みはあったものの、合格した喜びの反面、専攻科での一年を乗り越えていくことが出来るかという不安があり、入学当初は期待と不安の入り交じったとても微妙な気持ちで過ごしていました。しかし、実際の専攻科は、短大看護学科からストレートの人、看護婦として働いていた人が入り交じり、それぞれの個性でお互いが良い刺激となっている、にぎやかで明るく根はまじめなセミプロ集団です。セミプロである分、厳しいことも多々ありますが、学校行事や、セミナーなどの学習を通してクラスの団結も深くなっていく中で、一人ひとりが責任を果たし、みんなで乗り越えていけると思うようになってきた今日このごろです。

これからも、課題・実習の日々を乗り越え、今年出会えた私たちにしかない専攻科ライフを充実させていきたいと思っています。みなさん温かく見守っててください。

学生サークル紹介 バトミントン部

北海道地区 大学体育大会に出場

栄養学科2年 高萩 恵

「さあ、行くか!」の掛け声とともに、私たち4人は7月6日PM7:00にJRに乗り込んだ。JRの中では試合相手である旭川医科大学のことを話し合いながら、いよいよ明日へと迫った大会に胸をはずませていた。

大会当日、会場に着いた私たちは、練習光景を目の前にし圧倒されていた。しかし、周りに圧倒されている間もなく、ユニフォームに着替え、気合いを入れた。

高鳴る緊張の中、試合が始まり、試合をしている本人だけでなく、応援している人たちも一丸となって真剣に試合に臨んだ。結果としては4対1、1回戦負けと、良い成績を残すことはできなかった。しかし、大学に入り初めての大会で、私たちはいろいろな経験をし、これまで忘れかけていたものをまた見直すことができた。それは、仲間と協力し合い、一つの目標に対し一生懸命取り組むという姿勢だ。今回出場し

た団体戦は一人の力では勝つことはできない。一人ひとりの力が必要であった。確かに試合には負けてしまったが、団結力はどこよりも勝っていたと思う。

今回、大会に参加できたことはとても良い思い出となつたし、みんなにはとても感謝している。そして、応援していたみなさん、ありがとうございました。

来年の大会に向けて、新たな目標と挑戦が始まりそうです。



顧問の小泉先生(左端)と部員たち

教養教育科講師 小泉 ゆう子

バドミントン部は7月7、8日と釧路市で開催された第48回北海道地区体育大会に出場しました。惜しくも一回戦で敗退しましたが、今回の経験を生かせる来年在が今から楽しみです。できる範囲内で精一杯練習し健気に戦う学生たちは、勝

利ではなく、励まし合いながらの練習鍛錬の過程とそこで培われる仲間意識にこそ意義がある———ということを体現していました。なお、今回の出場に際しては、天使大学後援会から助成を頂きました。

(バドミントン部顧問)

学校行事 合唱コンクール

3年目の優勝

短大衛生看護学科3年 大瀧 幸恵

うさぎ追いかの山 こぶな釣りしかの川
夢はいまもめぐりて 忘れがたきふるさと

天使での学生生活最後の合唱コンクールに私たちが選んだ曲がこの『ふるさとの四季』だった。涙と共に歌ったこの歌は、私たちの学生生活最高の思い出として残っている。

看護はチームワークで成り立つ。周りとの協力が大切だ。入学当時に教えられ、テストや実習など何度も実感してきたことである。自分たちで言うのもおかしいかもしれないが、私たち衛生看護学科3年生はどのクラスにも負けない団結力を持っている。悩みをぶつけ合い励ましあい実習を乗り越え、行事にしても応援の熱の入り方にはものすごいものがある。こんな看3の団結力を深めていった大きなものに合唱コンクールがある。

勢いのみで突っ走り3位に入賞した1年時。合唱コンクールの意味もわからずただただ歌うだけだった。全盲の少女が書いた詞を歌った2年時。“私の中ではうさぎって飛ぶんだよ”という全盲の少女の思いを



学生の学外活動

ボランティアに参加して

栄養学科2年 清水 祐理 鈴木 美保

私たちは去年の春から西区民センターで『銀河』という配食ボランティアに参加しています。西区に在住する高齢者の方を対象とし、宅配弁当を作っています。活動日は第2・4・5土曜日の午後1時から4時までで、2人で交代に参加しています。メンバーは私たちを含めて4～5人で毎回40食前後作ります。

私たちの仕事の内容は、参加当時は野菜を切ったり、出来上がったものを分けてお弁当箱につめたり、洗い物等が中心でした。それから徐々に慣れていき、ひとつの料理を担当させてもらうようになりました。そして、クリスマスのお弁当からデザートを担当するようになり、今までに、クレープ、ロールケーキ、よもぎ餅、フルーツゼリーなどを作りました。

季節に合わせた食材を組み合わせるは大変ですが、高齢者の方々に喜んでいただいたと聞いたときは、とてもうれしかったです。

今年に入り、なんと献立まで考えることになり、まだ取り組んではいませんが、これからの勉強の一環とし、頑張ろうと思います。

このボランティアでは、一緒にやっている方々が全員栄養士として働いていた経験があるので、いろいろなお話を聞くことができたり、実際に多人数の食事を作るので、大変勉強になります。このボランティアに参加できて本当によかったと思っています。これからも頑張っていきます!!



よさこいへの熱い思い

看護学科2年 須見 奈津代

今年、第10回を迎えた「よさこいソーラン祭」。ついに祭の参加人数は日本最大となり、6月上旬、札幌で開かれました。



ところでみなさんは、よさこいの活動が6月で終わりだと思いませんか。実は、私たち踊り子は6月の本祭後、踊り披露のために全国各地で行われる祭へと渡り歩き、年中踊っています。

よさこいチームに入ったのは、大学1年のとき。1年目は、飲み会大好き・恋話盛りだ

くさんの学生チームでした。練習中も休憩中も活気があり、練習のない休日にはドライブに行ったりと、チームの親睦を深める活動がたくさんあり、他の大学にも多くの友だちをつくることができました。2年目の今年は、ちょっと背のびをして社会人チームへ。大賞をとったことがある有力チームであったためか、前のチームとは違った迫力を感じ、おおきな「ショック」を受けました。けれども、チームの人たちと打ち解けてくると、一人ひとりがよさこいへの熱い思いをもっているんだな……としみじみすることもありました。

踊り子2年目の私にとって、よさこいの魅力は2つあります。1つは、汗を流して踊る気持ちよさ。そして2つ目は、踊りを通した人と人との交流のおもしろさ。この2つが理由で、私はよさこい中毒になってしまったようです。理由は様々あると思いますが、同じくよさこい中毒にかかっている人を何百人も見えています。踊り子経験者は、みな言います。「たくさんのスポットライト、身体の芯にまで響く大音量の曲、そして大勢の観客は心を沸かせる！」

お客さんからの拍手は、踊りを楽しむ私たちの気持ちが伝わったかどうかのパロメーターだと思っています。私たちの踊りを見て、自然と笑顔になって応援してくださるお客さんを見つけたら、一体感を感じます。こんな感動を味わえるよさこいを続けていきたいと思っています。

看護学科主催 対話集会

看護学科長 菅原 邦子

7月9日、Sr.寺本松野（マリアの宣教者フランシスコ修道会）と本学学生との対話集会が開催されました。Sr.寺本は、60年間の臨床看護実践を通して、「結核」「癌」と「生と死」にかかわる病に苦しむ人々と共に歩み、独自の看護観を打ち立てられました。また執筆活動や全国各地での講演活動を通して終末期看護の普及に尽力され、この6月にフローレンス・ナイチンゲール記章を受賞されています。Sr.寺本は、「私の看護は天使病院の結核患者さんから始まる」と話され、看護職で問われた3つの問い——①末期のがん患者さんから問われた「死とは何か」、②あなたにとって看護とは何か、

③「修道者と看護婦のどちらかを選択しなさい」と問われたら、どちらを選択するか——を柱に語られました。出会った患者さんとの場面が生き生きと感じられるお話は、学生たちに看護職の魅力を考えさせ、勇気を与えてくださるものでした。



スリ・ランカでの国際協力

看護学科助手 正岡 経子

世の中がミレニアムでわきたつ2000年7月10日から9月23日の約2ヵ月半の間、私は国際協力事業団（JICA）の短期専門家としてスリ・ランカ看護教育プロジェクトに大学から派遣され活動してきました。このプロジェクトは、同国の看護婦不足への対策と質の向上の為に看護教育全般の技術協力を目的に立ち上がったプロジェクトで、私に期待された活動は、母子と婦人科看護学のハンドブックの作成でした。この国では本はとても高価なものであり、学生たちは授業の間に図書館から借りてきた本を皆でまわして見たり、コピーして使ったりしています。そこで看護学校として統一した教材をより安価で供給し、授業の効率を上げることをねらいとしています。私が担当したのは母性と婦人科看護で、小児の部分は同じく沖縄から派遣されてきた短期専門家が担当しました。

青年海外協力隊と明らかに違う点は、活動内容が最初から明確であり、(短期間の) 期限つき責任つきであるということです。更に、ホテル住まいだったため相手の生活や文化などを十分に知るまもなく活動に取り掛からなくてはいけませんでした。「この国の人たちが使えるものを作りたい。」ただ、その一心でカウンターパート（現地側の協力者）のラナワカ先生と保健伝統医学省との話し合いが続きました。目的や使い方などイメージしているものが違えば、内容も全く違ったものになってしまいます。ハンドブックとは何ぞや？そんな原

点に戻ることもしばしばでした。

結局、私の活動期間中は第1稿までで、後はカウンターパートに託すことになりました。ハンドブックが完成し日本にいる私の手元に届いたのは年が明けての1月末でした。ハンドブックを開くたびにスリ・ランカで出会った人々とスリ・ランカカレーが私の心の中をよぎります。今後は、このハンドブックを看護教育に携わるスリ・ランカの人たちの手で、自分たちの使い易いものに改訂していってくれることを望んでいます。

最後に、私にこのようなチャンスを与え、支えてくださった皆様に心から感謝したいと思います。ありがとうございました。



スタッフと共に。中央が民族衣装を着た筆者。

22年分の思い出

旧職員 成田 きぬ



私が天使にお世話になっていた1963年から1985年までの間には、たくさんの思い出があり今でも甦ってきます。

春休み、人影のない校舎へご挨拶に伺ったその日から、私の人生は一変し、人の「母さん」から「用務のおばさん」

として天使短大と共に歩み始めたのでした。3号館完成後間もなくのことで、ご案内してくださった学長様は外国人で、やさしい物腰でした。「困った事があったら何時でも私に教えてください」と、とてもきれいな日本語でおっしゃってくださいました。また学長代理はSr.吉田先生で、フェリシア様と呼ばれており、「えくぼの君」とも言われていたようです。旧館の床はよく磨かれており、食品化学実験室があり、先生や学生たちが試験管と向き合っている風景が見られました。当時、田舎から札幌に出てきたばかりの私は心細い毎日でしたが、先生方の人間性の豊かさや、やさしさに助けられる毎日でした。今でもお力になっていただいております。

3号館の1階は調理室で、賑やかな調理実習風景でした。廊下にまで魚が飛び出してきて、学生がキャーキャー追いかけるシーンも時には見かけ、学ぶことの大切さ楽しさを思い、うらやましくも思いました。2階には、栄養科学生寮アスタホームがあって、後年、寮母として数年務めさせていただきました。Sr.セルビアナ様やSr.カルワリオ様が、いつも心をこめた栄養指導や生活指導をされていました。寮生は清纯で、真面目な方ばかりで、私には楽しい思い出がいっぱい

でした。当時の寮生の方々とは今でも交流が続いていて、2年毎の寮会でお目にかかるのが楽しみのひとつです。

天使短大には5人程のシスターが熱心に教育にあたっておられました。なかでもSr.セルビアナ様は、講義の間に、校庭前や中庭に季節の花々を咲き溢れさせていました。「栄養士や看護婦にとってお掃除は大事なことですよ」と、みずから先頭に立って働き、女性としての、また、人間としてのやさしさを教えようと、いつも一生懸命だった姿が思い起こされます。

天気の良い日には天使病院のベビーホーム（孤児院）の子どもたちがリヤカーいっぱいに乗せられて、芝生をはいずり回って遊んでいる風景はとても平和なものに見えました。でも、孤児の中には五体の整っていない児や、黒い肌、青い目の子もいて、戦後の混沌とした時代の後、道徳観念が希薄になってきたようにも思えました。子どもは親を選べず何も知らずに生まれてきます。このような子どもたちを、キリスト教精神に基づいて育てているシスター方に、私は只々、驚きと尊敬の目で見ておりました。

寮母を辞めた後、退職の日まで事務室で働き、シスターを始め教職員の皆様に支えられ、助けられながら、大過なく勤めることができました。天使で勤めさせていただいた22年間に身についたこと、それは、「祈ること」でした。自分のためだけでなく、人のために祈ることの大切さを教えられました。

この秋には81歳を迎える高齢者となりました。日々を大切に、感性を柔軟にすべく、ボランティアや老人会の地域活動に参加したり、俳句、お花、踊り、民謡などいろいろな趣味に勤しんで楽しく暮らしております。

オープンキャンパス開催

7月31日(火)に栄養学科、8月1日(水)に看護学科のオープンキャンパスが実施されました。栄養学科には道内外各地から172名、看護学科には157名の参加者があり、参加者数としては過去最高を記録し、看護栄養学部への関心の高さがうかがわれました。プログラムは、午後1時30分から開始され、学部・学科紹介、進路状況・入試要項の説明、模擬授業、施設見学、在学生・教員による個別の相談があり午後4時30分に終了しました。

なお、両学科の模擬授業の内容は次のとおりでした。

*栄養学科

調理科学実験：生のパイナップルを使用したゼラチンゼリーの変化の検証

臨床栄養学：骨粗しょう症予防を中心に正しいダイエットについての講義

生化学実験：自分の血液型・血糖値の測定

*看護学科

基礎看護：ベットメイキングの実践

成人看護：呼吸音・心音聴取、救急蘇生

母子看護：妊婦体験・赤ちゃんの抱き方・オムツ交換

老年・地域看護：高齢者体験・車椅子操作



平成13年度入試を振り返って

栄養学科教授 荒川 義人

天使大学として2回目となる平成13年度入試は、大学入試センター試験の新規利用、入試科目の見直し等、短大時代とは異なる部分があり、実質的な意味で大学の入試制度が確立した最初の入試と言えます。推薦、社会人入試において、とくに小論文の課題の傾向が、これまでと違っていたためか、各方面からとても難しかったという感想をいただきました。現在、担当者は精力的に課題作成に当たっています。また、全国的には数カ所でトラブルが発生したセンター試験でしたが、本学の場合、準備段階から教職員が一丸となって取り組んだ成果が現れ、無事に2日間を終えることができました。教職員にとっては、センター試験は疲労困憊の中にも貴重な経験となりました。このセンター試験と一般入学試験では、看護学科において第一段階の選抜を実施しました。これも平成13年度入試から初導入となりましたが、個人面接の時間が従来の2倍程度になったことで、面接内容は一段と充実をはかることができました。短大専攻科の入試も、従来どおりの形で無事に終えることができました。保健婦・助産婦を同時に取得できる専攻科は、平成14年度、最後の入試を迎える予定です。

平成14年度入試に向けて、既に要項も完成し、準備も順調に進んでおります。試験日程以外は平成13年度入試と同様に実施されます。本学の入試に対する基本的な考え方、特徴等については学外の多くの方々にもご理解を賜っていると存じますが、一方で頂戴する貴重なご意見、ご要望については入試委員会等で十分な検討を重ね、入試制度のさらなる充実を図っていく所存です。

(入試委員長)

新しくスタッフになりました

(新任教職員)

教養教育科

浦澤 价子 教授・環境健康論

看護学科

尾坂 良子 教授・健康生活看護学

佐藤 昇子 助教授・健康生活看護学Ⅰ-1(母子)

大西由希子 助教授・健康生活看護学Ⅰ-1(母子)

服部 容子 助手・臨地実習

栄養学科

佐藤 裕保 講師・臨床栄養学各論

事務局

山本 敏子 事務局図書課長

長い間お世話になりました

(退職教職員)

看護学科

久川 洋子 助教授

栄養学科

杉山 佳子 教授

事務局

多賀 照子 事務局図書課長

武田 凱治 事務局理事長付

2001年度在籍者数 (2001年9月10日現在)

	学 科	人 数	
大 学	看護学科	1年	89
		2年	86
	栄養学科	1年	102
		2年	94
短期大学	専攻科	22	
	衛生看護学科	57	
	食物栄養学科	1	

編集後記

学報第2号をお届けします。

通学路のプラタナスも色づき始め、秋の深まりと共に7号館の工事も順調に進んでいるようです。

学校行事や学生たちの活動など、大学2年目の歩みをお伝えできるようたくさんの原稿を集めたため、今回掲載できないものもできてしまいました。次号には必ず掲載します。

編集作業の過程で、さまざまな写真をみながら、いろいろなエピソードを伺いつつあれこれ話を交わし、天使大学の生き生きとした現在にふれるとき、編集冥利につきるという思いでいっぱいになります。今回はとくに、学生たちの躍動感あふれる姿や表情に元気を分けてもらいました。

次回の学報は来年3月末発行の予定です。

(広報委員会 山部・青木)